

## 日本のゲイアプリをめぐる多様な経験

砂川 秀樹

位置情報を利用したゲイ／バイセクシュアル男性向け出会いアプリ（ゲイアプリ）は、世界中のゲイ／バイセクシュアル男性など男性同士の出会いを求め人たちのネットワークについて語る上で欠かせない存在となっている。しかし、日本における研究は非常に少なく、使用当事者の声はあまり聞かれていない。そこで、日本のゲイがどのようにゲイアプリを経験しているか、記述回答を中心とした57名のアンケート結果と筆者自身の自己省察から考察した。同質的な回答者の中でも、使用目的がセックスなどに集約されるわけではなく、評価も分かれ、ゲイアプリを通じた経験は多様である。また、ゲイアプリ内のコミュニケーションやつながりは、アプリ空間に閉じられたものではなく、他の場や空間での新しい出会いや既存の関係も横断している。だが、多様な経験が示される中で、初めて使用した時の印象には、同様な表現が多数見られた。それは、「こんなにたくさんゲイがいる」というものだ。その驚きをもたらしたのは、近接性と写真つきのプロフィールによる匿名性の低さによる可視化だ。また、異性愛者と同性愛者の出会いの〈遍〉在／〈偏〉在の違いがあるからこそ、大きな驚きが生じたとも言えるだろう。ゲイアプリの影響が与えている意識や行動の変化を理解するためには、さらに多くの経験の聞き取りが必要である。

キーワード：ゲイ、出会い系アプリ、ゲイアプリ、当事者研究、オートエスノグラフィー

### 日本のゲイアプリの当事者研究として

2009年3月、位置情報を利用した、ゲイ／バイセクシュアル男性向け出会い

アプリ（以下、ゲイアプリ）が世に初めて登場した。米国発のそのゲイアプリ Grindrは、リリース後最初の1年では利用者50万人ほどだったが、それから3年後には192ヵ国に広がり、利用者600万人に至っている（Groves et al 2014）。その後、同様なアプリが次々と出され、ゲイアプリは今や、世界中のゲイ／バイセクシュアル男性など男性同士の出会いを求める人たちのネットワークについて語る上で欠かせない存在となっている。

Grindrはその後、対象をLGBTQ向けへと拡大し、他にもLGBTQが対象であることを明示するアプリが登場するようになった。しかし、対象がLGBTQと表示されていても、日本では、実際の使用者の大部分がゲイ男性であることも多く、ネット記事などでもゲイアプリと総称される傾向にある。よって、ここではこうしたアプリをゲイアプリと呼ぶ。なお、主な対象の性的指向に関係なく総称する場合にはマッチングアプリと、いずれも文脈でわかる場合には単にアプリと記している。

マッチングアプリの研究は、異性間と同性間を分けて研究されることが多く、両方を調査対象としていても、それぞれに議論が立てられることがほとんどだ（Groves et al 2014, Wu and Trottier 2022, Wu and Ward 2018）。だが、Chan (2021) は、中国広州市のストレート男性、ストレート女性、クィア男性、クィア女性、67名にインタビューを行い、それぞれの特徴を意識しながらも、「ネットワーク化された性的公衆 (networked sexual publics)」という概念を提示することで統合的に論じている。そして、それにより、マッチングアプリの技術的特徴が提供するアフォーダンスを明らかにし、そこでジェンダー／セクシュアリティをめぐる抵抗と支配が、社会全体の規範や権力とどのように関係しているのかを分析している。

今後、日本でも異なる性的指向の人たちの経験を合わせて調査分析することで、日本のジェンダー／セクシュアリティの支配的な価値観とマッチングアプリの中での実践の関係を示せる可能性があるだろう。その意味で、「ネットワーク化された性的公衆」に関する報告（チャン 2021）と日本の異性愛者向けマッチングアプリに関する研究（高馬 2021）の報告を併せて議論した、2021年の国際ジェンダー学会のシンポジウムは、先取的であった。

だが、日本のマッチングアプリの研究は、まだ始まったばかりだ。異性愛者よりはるかに早くマッチングアプリを取り込み、大きな影響を受けてきたゲイに関する研究すら少ない。ルッキズムやヘテロノーマティビティ、ジェンダー表象に関する考察はおこなわれているものの（石田 2019, 水谷・河口 2021）、ゲイアプリ使用者の経験に基づいた研究はほとんど見られない。

そこで、本論では、記述回答を中心とした57名のアンケート結果と筆者自

身の自己省察から、ゲイアプリ使用者の経験を示し考察することで、日本のゲイアプリに関する当事者研究の端緒としたい。今後はインタビューもおこなっていく予定である。

なお、今回は、ゲイだけを考察対象としているが、ゲイアプリは、バイセクシュアル男性やトランスジェンダーなど他のセクシュアルマイノリティも使用していることを記しておきたい。ゲイアプリの広告で回答者を募り実施された、ゲイ／バイセクシュアル男性のセクシュアルヘルスに関する「LASH調査」は、6921人から回答が得られているが、その性的指向は、ゲイが79.5%、バイセクシュアルが16.3%、性別では1%がトランスジェンダーとなっている（生島 2018）。調査対象を考えると、実際のトランスジェンダーの占める割合はもっと高いだろう。

## 筆者のゲイアプリの当事者性

ここで、ゲイアプリに関する筆者（以下、私）の使用歴を簡単に記しておく。それは、自身の経験も考察の対象としているからだけでなく、調査分析が自身の経験と切り離すことができない以上、考察の文脈を示しておいたほうが良いと考えるからだ。

私が初めてゲイアプリを使ったのはGrindrだった。同アプリのリリースから1年ほど経った頃だと思う。それから、1-2年ほどしてGrindrより人気が出ていると噂になっていたJdに登録（ゲイアプリの代名詞となっているGrindrと引用を除き、ゲイアプリ名を略称で示す）。2011年には、日本企業が出した9Mを使うようになった。これらは、重なり使用する期間がありながら、次第に乗り換えていったメインアプリだ。最終的に9Mに落ち着いたのは、利用者が、体型などのイメージと結びつく9つの動物イメージに分類される機能があり、その分類にワイルドベア（がっちりした熊っぽい人のイメージ）やチャビーピギー（「ぽちゃ体型」からかなり太っている体型の人のイメージ）というものがあつたことが大きい。それにより、自分のように太っている者も使用者として想定されていると感じられた。また、サブアプリとして、ベアタイプやベアタイプ好きが多いと言われるアプリ二つにも登録し、3年ほど前には、中国で開発され同国で圧倒的に人気のあるBdにも登録した。結果、使用経験のあるアプリは6つだが、現在は、ほとんど9Mしか使っていない。ここ2-3年、ゲイアプリの使用頻度は減っているが、現在も週に2-3回アクセスしている。9Mでは、プロフィールに掲載する募集内容を「友達募集／恋人募集／その他募集」から複数選択できるようになっている。「その他」は、セックスを主とする出

会い募集の意味として解釈されたりもする。私自身は、どの募集も選択してきたし、実際にどの出会いもあった。ゲイアプリをきっかけとして出会った人は、大まかな印象だが50人ほど。挨拶を超えるメッセージのやりとりをした人は、その20～30倍あるいはもっとかもしれない。こうした経験からわかるように、私自身はゲイアプリに馴染んでおり、積極的に活用してきた者だ。本論は、その立場からの考察となる。

また今回、アンケート回答を依頼した相手は、私の友人、知人で、その半分以上がゲイアプリで知り合った人たちだ。よって、ここで示すのは、私の周辺に形成されているネットワークにおけるゲイアプリの経験であり、ゲイアプリ使用者全体の傾向性についてではない。ましてやゲイの典型のようにとらえるのは、大きな誤りであることを強調しておきたい。

## 多様な使用目的

2022年7月5-15日、LINEでつながっている友人・知人76名にアンケート協力依頼を送信した。57名から回答があり、使用経験がないという3名を除くと回答率は75%だった。回答者の年代は、20代3名(5.3%)、30代6名(10.5%)、40代22名(38.6%)、50代24名(42.1%)、60代2名(3.5%)。居住地は、東京が34名(59.6%)で、埼玉2名、千葉2名、神奈川1名を合わせると首都圏在住が68.2%。性的指向(複数選択)は、ゲイ54名(94.7%)、ゲイ&バイセクシュアル4名(7%)、バイセクシュアル1名(1.8%)だった。性別についても選択肢を挙げ尋ねているがトランスジェンダー、Xジェンダーを選んだ人はいなかった。ゲイアプリ使用開始は、2009～11年頃が28名と半数以上、2012年頃と合わせると38名で7割近くになる。最も近い年で2018年だった。ただし、「すぐにやめた」という人もおり、皆が継続的に使用しているわけではない。私自身が、ゲイアプリを長年使用してきた50代半ばの東京在住ゲイであることから、回答者も、40-50代が中心で首都圏在住のゲイが多い。利用開始年が古い傾向は、年代とも関係しているだろう。

このように、私のつながりの中で依頼したことから、属性的には全体として同質性が高い。しかし、それでもゲイアプリに関する経験はさまざまだ。

ゲイアプリはセックスのためのアプリ、というイメージを持つ人も多い。だが、この一年の主な使用目的について尋ねた質問(自由記述)の回答を、次の5つのカテゴリーに分けると、セックスに関する記述が突出しているわけではない。以下、引用には年齢と居住地を( )内に示し、引用に加えた注釈には[ ]をつけた。

セックス…14名／恋人・パートナー…14名／友達…10名／閲覧…12名（「ひまつぶし」1名「なんとなく」1名を含む）／連絡ツール…10名

また、「会話のやり取り，友達作り，あわよくばリアルセックス」（54 東京）など，使用目的は同時にいくつも存在し，「出会い系アプリケーションだからエロを期待しがちだが，趣味や興味が合う友人を作ることができる」（54 沖縄）という記述があるように，期待や目的と異なる結果が生じ得る。

「連絡ツール」に含めた回答には，「既知な人との連絡」（45 東京）／「ハッテン場などで会った人に，後日［アプリ上で］声をかけやすくなった」（41 埼玉）というものがあった。それは，アプリがその外での関係もつないでいることを示している。私も，友人が近くにいたり，オンライン中だったり，あるいはオンラインから間もなかったりすると，メッセージを送ることがある。そうした友人には，旧知の仲も含めアプリ外で知り合った人も多い。LINEなどの連絡先を知りながらも，しばらく連絡していない人だと，距離やオンライン時間が近いことが，連絡をするきっかけとなる。Chan（2021）がマッチングアプリの5つのアフォーダンスの一つとして「近接性」を挙げ，物理的距離について説明しているが，近接性にはアクセス時間の同時性や時間差も含まれる。このような近接性の表示に方向付けられながら，マッチングアプリはコミュニケーションを促進するわけだが，そのコミュニケーションやつながりは，アプリ空間に閉じられたものではなく，他の場や空間での新しい出会いや，既存の関係も横断していると言えるだろう。

## ゲイの可視化の衝撃

目的だけでなく，ゲイアプリを通じた経験には大きな違いがある。「あまり出会えないしめんどくさいだけ。数年前からあまりやらなくなった」（49 沖縄）という人もいれば，「交友関係が広がり，ゲイライフを楽しめた」（44 神奈川）／「5年前にBLUEDというアプリで出会った人と交際しました。私の人生の中では，最も長く交際が続いた関係です」（54 東京）という人もいる。

しかし，このように，それぞれ異なる経験がある中で，ゲイアプリを初めて利用した時の印象について尋ねた質問への回答には，同様なものが多く見られた（場所は最初に使った当時の居住地）。

「こんなにゲイの人っているんだと」（25 広島）／「こんな近くに同じゲイの人々が住んでるのかと嬉しかった」（28 ベルギー）／「近くのゲイ・バイ男性が可視化されて感動した」（30 西日本）／「ゲイバーなどのオープンなコミュニティ以外にも，いろんな場所にゲイの人がいるんだなあと改めて認識し

た」(40 東京) / 「同類が周りや近くにも居ることが分かるのがすごい、嬉しいと感じた」(42 沖縄) / 「こんなにたくさん、ゲイが近くにいるんだと驚いた」(47 東京) / 「世の中にこんなにたくさんの仲間がいるのか、と驚いた」(49 大阪) / 「こんなに近くに！こんなに！ゲイが！いる！」(51 東京) / 「熊本にもこんなにたくさんゲイがいるんだと」(60 熊本)

こうした回答が他に10件あった。20代も含め、全ての年代の人が同様に感じていることは注目に値する。また、今回のアンケートの回答者には、さまざまな方法でゲイと出会ってきた人たちが多く(ゲイアプリ使用前の利用経験に関する質問で、出会い系インターネットサイト75.4%、ハッテン場専用施設75.4%、ゲイバー 56.1%という結果が出ている)。幅広い年代で、ゲイと会う手段を使ってきた人たちが、「こんなにたくさんゲイがいる」と驚いていることは、ゲイアプリの持つ特徴とそれがもたらした影響を考える上で重要だ。

私自身、ゲイアプリを初めて使ったときは、ゲイバーに通い始めて20年以上経っており、その2年前には新宿二丁目を研究した博士論文を提出していた。さらに、ゲイの活動家としてLGBTQのパレードやゲイイベントを何度か主催した経験を持ち、多くのゲイが集まる場に何度も立ち会った。だがそれでも、ゲイアプリを初めて使ったときには「こんなにゲイがいる」と驚いた。それまでも多数のゲイが集まる場に身を置いたときに、感動をもって「こんなに」と思ったものだが、位置情報を伴いゲイの存在が見える様子に、あらたな衝撃を受けた。こうした驚きは、それまで周囲に「ゲイがいない」と感じていた人には、「学校では孤独だったが、アプリを開けば多くの仲間がいることに感動した」(32 東京)といった経験をもたらすこともある。

そして、マッチングアプリのアフォーダンスとして「視覚性」が挙げられているように(Chan 2021)、「こんなに」という衝撃には、位置情報だけでなく写真(特に顔写真)の掲示も大きな役割を果たしている。写真つきで継続的に存在するプロフィールページによって、個々人の存在が確かなものとなる。ゲイアプリは、匿名的な空間ととらえられがちだが、インターネットの出会い系アプリやハッテン場に比べると匿名性ははるかに低い。もちろん、ゲイアプリに関しても、「周囲になりすまして写真を使われるなどの被害が凄く多い」(44 東京)と語られるように、写真が本人の物とは限らず、プロフィールも不確かだ。だがそれでも、さまざまな出会いにおいて匿名性が高かったゲイにとって、位置とともに個人が表出されていることは驚くべきことだった。ゲイアプリによって、ゲイはゲイにとっても可視化したのだ。ゲイアプリのプライバシーへの不安は、匿名性の低さの証左とも言える。「顔と距離が見れてしまうのは少し怖いなとも思いました」(28 ベルギー) / 「同時に身バレすることへの不安

もあった」(42 沖縄)

そして、特定性を持って個人が表出しているからこそ、先に述べた、他の場や空間での新しい出会いや既存の関係も横断する機会ともなっているのだ。

## 異性愛と同性愛の経験の違いとゲイの変化

マッチングアプリにおける異性愛者と同性愛者(本論ではゲイ)の経験には、可視化の衝撃も含め、様々な違いがある。その違いの土台にあるのは、異性愛の出会いの可能性の<遍>在と、同性愛の出会いの<偏>在だ。異性愛は、学校、職場、家庭で前提として扱われ、異性愛者は、日常的に異性愛を語りながら、社会のあらゆる場所に友人、恋人、パートナーと出会う可能性が<遍>在している日常生活を送っている。一方、同性愛者は、自分の性的指向に関することを語らず、往々にして異性愛のフリをする生活を送り、出会いは、基本的にそれ用につくられたところで見つける。つまり、出会いが<偏>在しているのだ。「それ用につくられたところ」は、特に都市では発達していることもあり、アクセスできれば、ある意味では異性愛者より出会いやすい面もある。ここで指摘しているのは、あくまで異性愛者と同性愛者の間における日常生活での可視性と、出会いの<遍>在/<偏>在の違いだ。

この違いゆえに、距離に基づき写真が提示されることによるゲイアプリのもたらす可視化は大きな驚きをもたらした。そして、そこでの経験が積み重なる中で「ゲイであることを後ろめたく思わなくなってきた」(54 広島)という変化をもたらすこともある。

アンケートの回答後に届いたメッセージで、沖縄の離島に住む50代の友人は、それまでのオンラインでの経験とゲイアプリの経験の違いをこう書いている。

「ガービー [1990年代前半にあったゲイ専用のパソコン通信] にしても、ほかの掲示板も、やり取りしてる間は楽しかったのに、回線を切ると途端に現実の『距離』を思い知り、どんよりした気持ちになったものです。ナイモン [ゲイアプリ] で、『地元の人』とリアルできる、という事の幸せを噛み締めてましたね♪」

もちろん、経験の大きな違いで示したように、ゲイアプリは肯定的な影響だけを与えるわけではない。「イケメンが多すぎて容姿に関する自己肯定感が低くなった」(37 東京)「自己肯定感の低下?」(52 沖縄)という記述もある。また、「ゲイバーや風呂屋、発展場にそれぞれ独特のノリやマナーの様なものが有るように、出会系アプリにも特有のノリが有るなど。それに気付けない人はそこから弾かれて行っている印象」(53 沖縄)という記述からは、この空間

で疎外される人の存在も想像される。

ゲイアプリにおける経験は多様であり、一概に語ることはできない。だが、初めて使用したときに「こんなにたくさんゲイがいる」と驚いた経験は、多くのゲイに共通している。そのことは、ゲイであることへの意識に影響を与え、アプリ外での行動も変えているだろう。ゲイアプリ使用当事者の経験に注視しなければ、その変化(=歴史)を理解することはできないはずだ。まだまだ多くの経験が聞き取られていかなければならない。

(すながわ ひでき 明治学院大学)

### [参考文献]

- Chan, L. S. 2021 *The Politics of Dating Apps: Gender, Sexuality, and Emergent Publics in Urban China*. The MIT Press.
- チャン・リクサム 2021「マッチングアプリ文化におけるネットワーク化された性的公衆の出現」国際ジェンダー学会2021年大会シンポジウム「デジタル時代におけるジェンダー、セクシュアリティ、親密性」、東京
- Grov, C., A. S. Brslow, M. E. Newcomb, J. G. Rosenberger and J. A. Bauermeister 2014, Gay and Bisexual men's use of the internet: Research from the 1990s through 2013, *The Journal of Sex Research*, 51(4) 390-409.
- 生島嗣 2018『意外と知らない僕らのリアルなセックスライフ～LASH調査報告書～』
- 石田仁 2019「東京・新宿のゲイ・シーンにおける出会いと「多様性」トレンドな出会いの空間に着目して」『BLが開く扉 変容するアジアのセクシュアリティとジェンダー』, 青土社, 151-169
- 高馬京子 2021「日本のメディアで構築される異性愛恋活・婚活マッチングアプリ利用者という規範的女性像」国際ジェンダー学会2021年大会シンポジウム「デジタル時代におけるジェンダー、セクシュアリティ、親密性」、東京
- 水谷幸広・河口和也 2021「マッチングアプリ「9monsters ナインモンスターズ」におけるゲイの身体変容ーリアル・スペース「ゲイバー」への影響」『広島修大論集』61巻2号, 1-17
- Wu, S & D. Trottier 2022, Dating apps: a literature review, *Annals of the International Communication Association*, <https://doi.org/10.1080/23808985.2022.2069046> (2022年8月2日最終アクセス)
- Wu, S & J. Ward 2018, The mediation of gay men's lives: A review on gay dating app studies, *Sociology Compass*, <https://doi.org/10.1111/soc4.12560> (2022年8月2日最終アクセス)

# Diverse Experiences with Japanese Gay Dating Apps

SUNAGAWA Hideki  
(Meiji Gakuin University)

Location-based dating apps aimed at gay/bisexual men (gay apps) have become a significant part of social networks worldwide. However, few studies of gay apps have been conducted in Japan, so the voices of Japanese users have rarely been heard. This paper shows how gay Japanese men experience these apps, based on a questionnaire survey of 57 respondents and the author's own self-reflections. Though the respondents are rather homogeneous, the purpose of use and their experiences through gay apps are diverse. Communication and connections within gay apps are not confined to the online world, but also cross new encounters and existing relationships in other places. While the diversity of experiences was commonly indicated, participants' impressions of using the apps for the first time were similar. They noted a sense of surprise that "there are so many gay people." What caused this impact was the apps' proximity-based visualization of other app users and the low level of anonymity of profiles with photos. The difference between the omnipresence of heterosexual encounters and the polarization of gay people in Japanese society brings about these feelings of surprise. To understand the influence of gay apps, researchers need to listen to more of their users' voices.

**Keywords:** gay men, matching apps, gay dating apps, autoethnography